

山の湯

森岡 正作

蠅叩く

船 笛 に 異 郷 の 響 き 明 易 し
山 の 湯 に 雨 後 の 新 緑 な だ れ け り
茅 の 輪 よ り 海 の 彼 方 の 富 士 拝 む
父 の 日 の 妻 子 を 駅 へ 送 る 役
消 し ゴ ム で 消 せ る 嘘 な り 冷 奴
山 家 か な 梁 に 乾 び し 蝋 吊 る
青 簾 上 げ て 真 鯉 を 捌 き を り

喜寿前後の登四郎先生は各社の俳句総合誌に次々と句を発表し、俳句の勢いの波に乗っている感じであった。(蠅叩くには手ごろなる俳誌あり)はそんな時の句である。恥ずかしながら小誌を持っている私には衝撃的な句であるが、私の俳誌は薄くて蠅を叩くには役に立つまいと思ったり、それでは端から問題にされないことと同じだと思ったりする。

考えてみれば、大体の結社誌が発行される月初めには、先生の手元に一日に十数冊届き三、四日もたてば山のようになったことであろう。いちいち細かく丁寧に読む時間は無かったと言っても過言ではない。さすれば私のような小誌は「井の中の蛙」を良しとして、会員達の憩いの場であつても良いと思うが、やはり一人でも多く趣味の世界を超えて、俳句の世界へ泳ぎ出す人材を生みたいと思うのである。